



平成 23 年 度

兵庫県公立高等学校学力検査問題

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1 ページから4 ページまで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙の右上の欄に受検番号を書きなさい。
- 4 解答用紙の  の得点欄には、何も書いてはいけません。
- 5 答えは、すべて解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。
- 6 問題は四題で、4 ページまであります。
 - (1) 一、二、三は、共通問題です。全員が解答しなさい。
 - (2) 四は、選択問題です。A、Bのうちいずれかを選んで、解答しなさい。
その際、選択した問題の解答欄の上にある  の中に、必ず○印を付けなさい。
- 7 「終了」の合図で、すぐ鉛筆を置きなさい。
- 8 解答用紙は、机の上に置いて、退室しなさい。

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

I 自立ということをわたしたちの社会は、さまざまなことを自分でできること、(自分の身体も含めて) 生きるに必要な多くのものを意のままにできることとして了解してきた。が、何かを意のままにできるということが自立なのではない。そうではなくて、意のままにならないということの受容、そういう「不自由」の経験をおのれの内に深く湛えつつ、何かを意のままにするという強迫から下り、^②ことを自然に受け容れるようになるのが、ほんとうの自立なのであろう。

II 「自立」と言えば、ひとはすぐに、他人の力を借りずに自力で生きられることというふうを考える。が、社会的サーヴィスがいくら充実していても、じっさいに動いてくれるのは機械ではなく他のひとだ。ひとがひとりできることはきわめて限られていて、食堂で何かを食べるときには、調理するひと、配膳するひとが要るし、音楽に浸りたいときには、曲を作るひと、演奏するひと、録音するひと、CDを売るひとが要る。からだが不自由になったら、^⑥介助をしてくれるひとが要る。人間はそういう無数の他者に支えられて生きているのであって、ひとりでは生きることなどたかが知れている。

III とすれば、「自立」とは、「独立」、すなわち他人に依存していないこと (in-dependence) ではなく、他人との相互依存 (inter-dependence) のネットワークをいつでも使える用意ができていくことをこそ意味するはずだ。困ったときに「助けてくれ」と声を上げれば、それにきちんと応えてくれる支えあいのネットワークのなかにあるということこそほんとうの「自立」であり、そのネットワークを支える活動が「自立支援」であるはずだ。

IV 自力で生きるのではなく支えあって生きる……。そのように他人とともに生きることがほんとうの「自立」であるとするれば、そのためには自分もときに支える側に回る準備ができていなければならない。嫌いでもつきあう、もめても話し合って解決する。そんなふうには、なじみのないひとともうまくやってゆけるよう、自分を鍛えておかなければならない。歳をとっても、何も不自由な身体をふりしぼってやることはない。他人に細々と助けてもらいながら、その助けてくれるひとを喜ばせて喜ぶことが

⑩ できる。そんな凹凸のうまく噛みあった関係を上手に配置することがほんとうの支えあい、つまりはインターディペンデンスではないかと思う。

(驚田清一『わかりやすいはわかりにくい?』)

問一 傍線部④・⑤・⑥・⑨の読み方を平仮名で書きなさい。

問二 傍線部①と同じ意味を表すことばとして適切なものを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 容易 イ 得意 ウ 気楽 エ 自在

問三 傍線部③・⑧に含まれている動詞の終止形を書きなさい。

問四 傍線部②を説明した次の文の空欄 a・b に入る適切なことばをそれぞれ書きなさい。ただし、a には I の段落から抜き出した十字以内のことばを、b にはあとのア～エから選んで、その符号を書きなさい。自立ということについて、これまでわたしたちの社会が a

ア 対立する意見を主張する イ 束縛されない立場に立つ

ウ 自分の考えを合わせる エ 新たな意味を見つける

問五 傍線部⑦について、「無数の他者」とはどのような人々か。解答欄に合わせて、II の段落のことばを用いて十字以内で書きなさい。

問六 傍線部⑩を説明した次の文の空欄 a・b に入る適切なことばを、それぞれ本文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

自分が一方では他人に支えられながら、他方では a という支えあいのネットワークの中で、助ける人と助けられる人とが互いに b という関係。

問七 本文における筆者の考えに合うものとして適切なものを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 機械化によって生活が便利になるにつれ、心の通い合いが希薄になりがちなので、機械に頼らない昔ながらの生き方も大切だ。

イ ひとは何かにつけ他人の力を借りなければ生きられない存在だということを利用して、相互に助け合うことが大切だ。

ウ 歳をとって体力が落ちたときに備え、若いうちから身体を鍛えるだけでなく、介助してくれる人への感謝の心をもつことが大切だ。

エ 相互依存のネットワークを形成するには争いを避ける努力が必要であり、常に他人の意見に耳を傾けて尊重する態度が大切だ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校二年生の中溝早希は、中学三年生の時に肩を痛め、中心選手として活躍していたソフトボールを続けることを断念せざるをえなかった。ある日の放課後、早希が、同級生の原千夏が歌の練習をしている音楽室にやって来たとき、物音を耳にして内側からドアを開けた千夏に話しかける場面である。

「練習、見ていてもいい？」

千夏はピアノのほうを振り返った。そこで私は千夏以外にも人がいたのかと初めて気がついたふうに顔を向けた。御木元玲はピアノの前の椅子にすわっていた。彼女は立ち上がり、そのまままっすぐ私の前まで歩いてきた。

「見ていくだけじゃなくて、一緒に歌っていけばいいのに」

べ、と私は口籠もった。べつに、歌いたいわけじゃない。でも、べ、しかいえずに口を噤んだ。御木元玲のクチヨウはあまりにも自然だった。

何もいえずに立っていると、彼女はまたピアノのところへ戻っていく。千夏が弾むような足取りで後を追った。どうしようかと思っっているうちに、ピアノが鳴り始めた。これが、コールユーなんとかだろうか。ドアを閉め、ゆっくりとピアノのほうへ近づいた。聞いたことのある曲だと耳を傾けていると、やがて千夏が歌い出した。のびのびと楽しそうに。どんな名曲かと思えば、うちの校歌じゃないか。へえ、と思う。退屈な歌だと思っただけど、こうして聴くとアンガイいい。

校歌を歌うことがどんな勉強になるのか知らない。御木元玲は千夏の歌いたいように歌わせて、自分は流暢にピアノを弾いているだけだ。それなのに、ちょっと楽しそうだった。千夏のおんまりうまくない歌が私を誘う。なんとなく私まで歌い出したくなる感じなのだ。

やがて歌が終わると御木元玲のピアノも鳴りやんだ。校歌の余韻が音楽室に残っている。

「私、歌を歌おうにも楽譜も読めないから。声の出し方も知らないし。もしたら御木元さんが、まずは好きな歌を歌おうって」

千夏が小声で説明してくれる。

「それで校歌？」

「うん。この学校に来てよかったな、って思うから」

そうか。そんな人もいるのか。この特に取り柄のないような学校に来てよかったと愛着を感じる人をマヂカに見て、驚くと同時にちょっと恥ずかしくなった。成り行きで入っただけだから、もう余生だから、学校は適当に出ておけばいいと思っていた。

「週に一度、御木元さんに教えてもらって、あとは自分でなんとか——」

「教えてないよ」

御木元玲がきっぱりという。

「伴奏するだけ。ときどき一緒に歌うだけ」

「でもそれだけですごく歌いやすくなるんだ」

千夏が熱っぽく語るのを、質問で遮った。

「あとは自分でなんとか、どうするつもりなの」

「だからさ、自分でも練習して、もしちゃんと歌えるようになったら、合唱部に入ろうかなって」

⑥ テレくさそうに千夏はちょっと俯いた。おいおい。声に出しそうになっ

て危うく言葉を

二年の冬だっというのに今から入部するつもりなのか、このおめでたい同

級生は。

⑦ あきれているはずなのに、胸がじんとしている。千夏の素直なパワーは

どこから来るんだろう。もしかして、この子にはぐるぐるはないんだらう

か。いや、と私はブレーキを踏む。たぶん、ぐるぐるのない人なんていな

い。それを忘れちゃいけない。ぐるぐるぐるぐる、きつと悩んでいる。楽

譜が読めないというのがほんとうだとしたら、ずいぶん勇気が要ったこと

だろう。同級生に初歩から歌を習うなんて。これから合唱部に入ろうなん

て。そういう気持ち、すごいと思う。余生じゃないんだ。

今も現役でぐるぐるどろどろががつがつしている人が、なんだか光って見

える。自分は降りてしまったはずなのに、そういう人の匂いを嗅ぎ分け

てはむかついていた。

認めなくてはいけない。余生ではない、本道を生きている人に嫉妬して

いたことを。

(注) コールユーなんとか——コールユーブンゲン。合唱練習曲集。

(宮下奈都『よろこびの歌』)

問一 傍線部①・②・④・⑥の片仮名を漢字に改めなさい。

問二 空欄に入る適切なことばを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 引き取る イ 練る ウ 飲み込む エ 濁す

問三 傍線部③はどのような様子を表現したのか。それを説明した次の文の空欄a～cに入る適切なことばをそれぞれ書きなさい。ただし、aには五字以内、bには十字以内の本文中から抜き出したことばを、cにはあとのア～エから選んで、その符号を書きなさい。

早希が [a] と思っていた校歌を、千夏が [b] 歌っている様子に、早希は御木元玲に声をかけられた時の [c] が消え、二人の雰囲気を引き込まれて快い気分を味わっている。

問四 傍線部⑤の早希の行動は、千夏に対するどのような気持ちの表れか。適切なものを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 同感情 イ 好奇心 ウ 警戒心 エ 反抗心

問五 傍線部⑦における、早希の心情を説明した次の文の空欄a・bに入る適切なことばをそれぞれ書きなさい。ただし、aには本文中から抜き出した十字以内のことばを、bにはあとのア～エから選んで、その符号を書きなさい。

千夏が御木元玲に歌を習い、今になって [a] としていることをつまらないと思いつつも、その [b] に感動が込み上げている。

ア 屈託のない言動 イ 冷静沈着な性格

ウ 用意周到な姿勢 エ 慎み深い態度

問六 傍線部③以降における、早希の自分自身に対する気持ちの変化を説明した次の文の空欄a～cに入る適切なことばをそれぞれ書きなさい。ただし、a・cは本文中から抜き出した二字のことば、bは本文中のことばを用いた五字以内のことばとする。

早希は、高校生活は [a] のようなものだと割り切っていたが、さまざまな問題に [b] も、目標に向かって [c] を出して行動する千夏のような生き方が本道だと気づき、自分の気持ちに素直に生きたいと思うようになっていく。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(高貴な人) ① にはかいたづきにかかれりけり。たやすからぬ様な

りければ、今このくすし一人に任せんもいかなり、彼もくすしの道には

世の常ならねば、これと心を合はせて、薬調ぜよと言へば、初めのくすし

頭ふりて、さらば、その世の常ならぬ者に任せたまへ、かかるとみのいた

づきを療治せんに、人を語らひてはいか出で来べきと言ひければ、げに

もとて初めの任せてければ、そのいたづきもすみやかに愈りぬ。

(松平定信『花月草紙』)

問一 傍線部①を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部②の本文中の意味として適切なものを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 人並みなので イ 風変わりなので

ウ 優れているので エ 常識がないので

問三 傍線部③のように言ったのは、急病にかかった高貴な人の病状がどうであったからか。それがわかることばを、本文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

問四 傍線部④の説明として適切なものを、次のア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 拒否 イ 思案 ウ 感心 エ 承諾

問五 傍線部⑤の理由を説明した次の文の空欄a～cに入る適切なことばをそれぞれ書きなさい。ただし、aには十字以内、bには五字以内の現代語を、cには本文中の二重傍線部ア～ウから選んで、その符号を書きなさい。

急病の時には、[a] ことよりも [b] 治療することの方が

大事だ、という [c] のことばに納得したから。

四 (選択問題) A、Bのうちいずれかを選んで、解答しなさい。
 A 次の詩と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

跡
 高橋順子
 海とか川とか樹木とか 人間が造ったのでないものの前にいるとき
 自分が
 せいせいして明るい跡になっている気がする
 機嫌のいい顔をして
 細胞は海に向かって喉をあけて
 わたしはわたしを思い出さないで

(鑑賞文) 誰でも、海などの自然を前にして癒されたことがあるだろう。
 この詩の作者も a ものから離れ、自然を前にして解放感に浸っている。その時、作者の身体は b にまで還元され、同時に、「わたし」が人間であった記憶も消えていく。その自然と一体化した自分の姿を、
 「c」と表現したのは、作者の独特の感性である。

問一 空欄 a、cに入る適切なことばを、それぞれ詩の中から抜き出して書きなさい。

問二 傍線部の気持ちを説明した次の文の空欄 A・B に入ることばの組み合わせとして適切なものを、あとのア～エから選んで、その符号を書きなさい。

日ごろ A を感じている B から解放され、すがすがしい気分になっている。

ア A 空虚さ B 想像の世界 イ A 高潔さ B 理想の世界
 ウ A 窮屈さ B 現実の世界 エ A 無力さ B 過去の世界

問三 詩の後半三行の表現上の効果について説明した次の文の空欄に入る適切なことばを、あとのア～エから選んで、その符号を書きなさい。

ア 呼びかける表現 イ 余韻を残した表現
 ウ 抽象的なことば エ 五音と七音のことば

B 次の漢詩と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

事に感ず	武 瓘
花開けば蝶枝に満ち	
花謝れば蝶還た稀なり	
惟だ旧巢の燕有り	
主人貧なるも亦た帰る	

主 人 貧 亦 帰	感 事	武 瓘
惟 有 旧 巢 燕	花 開 蝶 満 枝	
	花 謝 蝶 還 稀	

(解説文) 第一、二句では、花が開くと枝に a、花がしぼんでしま
 うと蝶はめったに姿を見せなくなること、また、第三、四句では、ただ
 燕は今年も同じ巢に帰ってくるということ述べている。

こうした蝶や燕の姿には、世の中の人のありようが見てとれる。人生
 には b 枯 c 衰があるが、燕のようにそのような移り変わりには関
 係なく、d もいるのだという感慨が込められていると読むことが
 できる。

問一 空欄 a に入る適切なことばを、十字以内で書きなさい。

問二 傍線部①に表されている状況と同じことが読みとれることばを、漢

詩の中から漢字三字で抜き出して書きなさい。

問三 書き下し文の読み方になるように、傍線部②に返り点をつけなさい。

問四 空欄 b・c に適切な漢字を書き、四字熟語を完成させなさい。

問五 空欄 d に入る適切なことばを、次のア～エから選んで、その符号を
 書きなさい。

ア なつかしい故郷を離れ苦しい生活をしている人
 イ 落ちぶれた主人には見向きもなくなる人
 ウ 故人との思い出を心の支えとして生きている人
 エ 旧知の人を忘れることなく訪ねて来る人

[] 点 一												
問七 点	問六 点		問五 点	問四 点		問三 点	問二 点	問一 点				
	b	a		b	a	⑧	③		⑨	⑥	⑤	④
			自分が ことをしてくれる人々。						(え)		(り)	(る)

[] 点 二													
問六 点			問五 点		問四 点	問三 点			問二 点	問一 点			
c	b	a	b	a		c	b	a		⑥	④	②	①
										(れ)			

[] 点 三												
問五 点	問四 点	問三 点	問二 点	問一 点								
c	b	a										

四 (選択問題) A、Bのうち、選択した問題の解答欄の上にある
 の中に、必ず○印を付けなさい。

[] 点 A						
問三 点	問二 点	問一 点				
		c	b	a		

[] 点 B						
問五 点	問四 点	問三 点	問二 点	問一 点		
	b	有 り 旧 巢 、 燕				
	枯	c				
	衰					